

日 時 平成30年2月21日(水)

午前10時00分～

場 所 都庁第二本庁舎31階 特別会議室23

葛西臨海水族園のあり方検討会 第2回

会議録

【会議】

午前10時00分～午後0時07分

○小林課長 それでは、定刻になりましたので、ただいまより第2回葛西臨海水族園のあり方検討会を開催させていただきます。

委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、また、お寒い中ご出席を賜りましてまことにありがとうございます。

議事に入りますまでの間進行を務めさせていただきます公園緑地部再生計画担当課長、小林でございます。どうぞよろしく願いいたします。

初めに、本検討会は公開にて開催することとさせていただきます。本日は、傍聴者及び報道関係者の取材がございますことをご了承いただきたくお願いいたします。

次に、お配りしております資料のご確認をお願いいたします。次第に配付資料一覧がございます。不足などがございましたら、お手数ですがお声がけ下さいますようお願いいたします。

また、委員の皆様にはご検討に当たっての参考資料1から4もお配りしておりますので、あわせてご確認をお願いいたします。

なお、本日本ですが、東京国立博物館 博物館教育課長の小林牧委員は所用によりご欠席との連絡をいただいております。川廷委員につきましても間もなくご到着いただく予定となっております。

東京都及び葛西臨海水族園を運営いたします公益財団法人東京動物園協会の出席者につきましては、恐れ入りますが、お配りしております座席表にてご確認いただきたくお願い申し上げます。

それでは、西座長、以降の進行をよろしく願いいたします。

○西座長 では、ここから私が進行を担当いたします。よろしく願いします。

それではまず、事務局より資料の説明をお願いします。

○小林課長 では、ここからは着座にてご説明を申し上げさせていただきます。

お手元にお配りしてございます第2回説明資料、こちらでございますが、こちらをごらんください。

表紙をおめくりいただきますと、裏面に目次がございます。第2回論点整理から最後の4章まで、通してご説明をさせていただきます。

1ページをごらんください。本日ご検討いただく論点を簡単にまとめてございます。

現在、地球環境に目を向けますと、温暖化や生物多様性の喪失など、生態系への影響が拡大してございます。地球の7割を占める海洋には多様な生物が存在しており、海洋の生態系サービスを健全に維持することは、私たちが海の恵みを持続的に利用する上で不可欠であります。

こうした中、持続可能な社会を目指した包括的な目標や計画が策定され、国内外で取り組みが進んでおります。

水族館は、神秘的な海の世界を身近に感じ、楽しみ、憩い、そして、学べる施設でございます。海への興味・関心を持つ入り口として、海と人をつなぐかけ橋になると考えられます。

そこで「これからの水族館はどうあるべきか」「都立水族館は何を担うべきか」につきまして、「1章・葛西臨海水族園の現状・課題認識」と、「2章・葛西臨海水族園を取り巻く社会状況」を踏まえまして、「役割・機能面」「運営面」「施設面」の3つの側面からご検討いただきたく、お願い申し上げます。

では、1章の「葛西臨海水族園の現状・課題認識」をご説明させていただきます。

ページをおめくりいただきますと、まず3ページでございますが、「役割・機能面」として、4つの機能と展示コンセプトについて記載をさせていただいております。

動物園、水族館には「種の保存」「調査・研究」「教育」「レクリエーション」の4つの機能がございます。葛西臨海水族園では、これら機能を相互に関連づけ、組み合わせながらよりよい機能を発揮させるとともに、バランスよく取り組むこととしてございます。

展示コンセプトは、水族館の理念・目標を伝える手段といえ、4つの機能と相まって、その水族館の個性・魅力を発信する重要な役割を担っています。葛西臨海水族園では「大型回遊魚の群泳による臨場感あふれた展示」「生態的テーマ展示」「海の豊かさ・多様さが理解される展示」「多様な手法による興味のつきぬ展示」を展示コンセプトに掲げ、理念でございます「海と人間の交流」の場となるよう、人々の海洋への関心を高め、楽しみながら海の自然への認識、水生生物についての科学的認識が培われる取り組みを行ってございます。

次のページをごらんください。まず「種の保存」でございますが、これは、環境保全に対します広い概念を含んでいると解釈をしておりますが、葛西臨海水族園では国内外の希少種等の保全や繁殖に取り組んでいるほか、都立動物園水族園4園でアカハライモリの生息域内保全を実施しております。日本動物園水族館協会、以降はJAZAと呼ばせていただきますが、JAZA加盟各館で取り組む繁殖調整も担当しております。これからも、希少種を初めとする野生生物の繁殖等を進め、生物多様性の保全にさらに貢献すべきと考えます。

次の「調査・研究」は、水生生物の飼育や水環境確保のための基本的機能であり、多岐にわたる調査・研究成果を展示などに活用しているほか、蓄積した技術などは学会や研究機関などに広く提供しております。これからも、調査・研究に裏づけられた高度な技術を飼育展示、繁殖、教育普及などに反映するほか、社会にも還元することが重要であると考えます。

5ページをごらんください。「教育」では科学的な観察を基本方針としたプログラムを実施しており、プログラムの多くは実体験や対話を重視した構成となっております。今後も

教育プログラムを拡充・発展させ、楽しみながら学ぶ取り組みを進めるなど、知的なレクリエーション機能を一層充実すべきと考えております。

また、水族館は非日常的なレクリエーション空間を提供することができます。お一人でゆっくりと海や生き物の美しさを楽しんだり、ご家族や団体で普段的できない体験や交流をお楽しみいただくこともできます。このように、多様なニーズに応じた憩いの空間としての必要性もあると考えております。

次のページ、「展示コンセプト」をごらんください。コンセプトは、先ほどご紹介しましたが、葛西臨海水族園では開園当時から現在まで生息地の環境をごらんいただく生態系を意識した展示をしており、大規模なリニューアルなどは実施してございません。ほかの水族館を見ますと、リニューアルなどにより、さまざまな視点、生き物の行動や地域の固有種などに着目した展示内容とすることで集客につなげている例も見られます。今後、葛西臨海水族園におきましても、展示コンセプトの発展・展示内容の向上が必要だと考えてございます。

7ページは、都立水族館の展示手法、展示内容の変遷を参考で掲載してございます。2番の写真は、水槽壁面に、いわゆる銭湯のように絵画が施されてございまして、時代の移り変わりとともに、展示の手法・内容とも大きく進化をしたという様子をご確認いただけるかと思っております。

次の8ページ、9ページは「運営面」でございまして。

まず、誰にでもお楽しみいただけるサービスでございまして、解説板や多言語案内ソフトの導入のほか、葛西臨海水族園にお越しただけでない方に「うみをとどける」移動水族館事業ですとか、障害のあるお子さんとご家族をご招待する企画なども実施してございます。これからも、ユニバーサルデザインへの対応を促進してまいりたいと考えます。

次は経費削減の取り組みであります海水使用料削減についてでございまして。葛西臨海水族園では新鮮な海水を運搬する必要があるため、運搬費として年間1億7,000万円ほどの経費が必要です。これまでも使用量を抑える工夫を行っておりますが、経費削減に向けまして、海水を長く使用するための技術開発を引き続き進めてまいりたいと考えております。

次は、来園者をふやすための取り組みについてです。現在は、年間約150万人前後の方にお越しいただいておりますが、開園当時と比べ、赤色の有料層の割合が低くなってございます。冬季にお越しいただく企画ですとか、夏季の時間延長、ユニークベニューなどの利活用も進めていますが、葛西臨海水族園の魅力を高め、来園者誘致につながる広報戦力などを展開する必要があると考えております。

次は、立地を生かした取り組みについてでございまして。葛西臨海水族園は東京湾に面して立地し、周辺には鳥類園や観覧車のある葛西臨海公園、海水浴もできる葛西海浜公園があるほか、カヌー・スラローム会場の整備も行われてございます。さらに、葛西海浜公園にはスズガモなどの渡り鳥が多く飛来するなど、すばらしい自然環境がございまして。

した周辺の施設や環境とのつながりを強化し、土地の持つポテンシャルを生かす取り組みを推進することも重要であると考えております。

次の10ページ、11ページは「施設面」でございます。

まず、「来年者ニーズ」ですが、今の園に不足していると感じる施設の上に「無料休憩所」「大きな水槽」「子どもの遊び場」「広いカフェ・レストラン」が挙がっております。校外学習などでご利用いただいている学校関係者の方からも無料休憩所の要望が強く、ほかに、広いレクチャールームを備えてほしいとの要望も多くございました。これらのニーズに対応するには、抜本的な更新が必要となっております。

次は「環境負荷軽減の取組」でございます。水族館は消費電力の大きい施設であり、葛西臨海水族園では、温室効果ガスの排出削減対策を実施しております。係数に基づいて算定されました基準排出量の一定割合を削減するため、さまざまな対策を講じているところでございます。今後も地球温暖化防止に向けた対策を着実に実施する必要があります。

次の「老朽化やバリアフリーに対する課題」は、第1回の資料を再掲してございます。設備などの抜本的更新やバリアフリー対応を講じることは、待ったなしに必要なことと認識してございます。

次のページからは「2章・葛西臨海水族園を取り巻く社会状況」でございます。

まず「国内外の主な動向」としまして、13ページは①「持続可能性」についての記載でございます。

平成27年に国連で採択をされました持続可能な開発目標（SDGs）は「誰一人取り残さない」社会の実現を目指し、先進国を含む国際社会全体で、経済・社会・環境をめぐる広範な課題に統合的に取り組むこととなっております。日本では8つの優先課題を定め、アクションプランとして具体的取り組みを示しております。優先課題には、気候変動対策や生物多様性なども挙げられております。

次の持続可能性に配慮した調達でございますが、法令順守、労働、環境、経済、人権などを考慮し、食材・木材等を調達するというもので、2020年東京大会でも重視されてございます。

持続可能なための教育（ESD）ですが、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育で対象も幅広いものですが、国内では現在、環境教育等促進法を踏まえた幅広い実践的人材づくりの取り組みなどが進められているというところでございます。

14ページは、②「生物多様性保全」でございます。

平成22年にCOP10で採択された生物多様性戦略計画は、2050年までの長期目標に、自然と共生する世界、全ての人々に不可欠な恩恵が与えられる世界を掲げています。短期目標には生物多様性の主流化などが挙げられ、20の個別目標である愛知目標が設定されております。この愛知目標の16に、ABSに関する名古屋議定書がございます。日本では昨年8月からABSルールが適用されており、葛西臨海水族園も海外で魚類等を採集する場合は、このルールにのっとり取得することとなりました。

次の海洋生物多様性保全戦略は、海洋の生態系サービスを持続可能な形で利用することなどを目的に策定されたものです。海洋の生物多様性保全につきましても、基本的な方針が明確化されました。

15ページは③「世界の動物園水族館の動向」でございます。

世界動物園水族館協会、以降WAZAと呼ばせていただきますが、WAZAが発表した2つの戦略がございます。まず、平成17年発表の世界動物園水族館保全戦略では、動物園水族館だけが統合的な保全活動に取り組むことができると記載されており、教育は重要な保全活動の1つであるとしてございます。

4年後に発表した世界水族館戦略は、水族館と動物園の相違点が示されております。主な相違点としまして、展示種の違いや展示生物の確保方法、水族館はレジャー産業として拡大していること、多くの水生生物が食用資源であることなどが挙げられてございます。

どちらの戦略におきまして、WAZAでは種の保存と環境教育をより重視する傾向となっております。

16ページは、④「国内の動物園水族館の動向」でございます。

JAZAの状況としましては、昨年末現在の登録水族館は60と、減少傾向にございます。背景には、イルカの問題も挙げられるかと思えます。現在は、鯨類の長期飼育・繁殖を推進する任意団体が設立されており、JAZAの枠組みを超えた連携も始まってございます。

登録館数の変遷のグラフをごらんください。所有・運営が公共か民間かを色分けしてございます。緑色の「公共所有－民間運営」の割合が増加しており、運営形態の多様化が進んでいることがご確認いただけると思えます。

17ページは、動物園水族館の法的位置づけでございます。動物園水族館は、これまで博物館法に基づく登録以外に法的な位置づけはございませんでした。動物園水族館の社会的位置づけを求める行為は以前からあり、さまざまな検討が重ねられた結果、昨年、種の保存法の一部が改正され、希少野生動植物種を取り扱う動植物園等を認定する制度が創設されました。動物園水族館が、気象保全に貢献する施設であることが法制化されたものでございます。

18ページからは、「都の施策・動向」でございます。

まず、①「都民ファーストでつくる『新しい東京』～2020年に向けた実行プラン」では、生物多様性の保全としまして、2019年度に葛西臨海水族園の更新に向けた事業計画の策定を定めてございます。また、2018年には、葛西海浜公園のラムサール条約湿地登録を目指してございます。

続きまして、②「動物園・水族館における計画・取組」でございます。ズーストック計画は、動物園水族館で飼育・展示している野生動物の計画的な増殖を図る計画で、平成元年に策定いたしました。ズーストック種として50種を選定し、うち葛西臨海水族園では鳥類3種を担当してございます。

19ページをごらんください。「都立動物園マスタープラン」は平成23年に策定し、葛西臨海水族園の目指す姿としまして、生態から食育までを楽しく学べる水族園としてございます。取り組みの方向では、海の生態系をありのままに再現する、各地の食文化や歴史を通して、海の恵みの大切さを伝えるとなっております。

次の野生生物保全センターは平成18年に多摩動物園公園内に設置したもので、都立動物園水族園4園で遺伝子解析などのより高度な調査研究、保全活動を進めてございます。

20ページをごらんください。③としまして「その他の計画・取組」2点を記載してございます。

「PRIME 観光都市・東京」は、世界最高の観光都市を目指す都の戦略でございます。葛西臨海水族園は、戦略4の1つとなっておりますユニークベニユーの会場として利活用する取り組みも進めてございます。

次の「地球温暖化対策」ですが、都では大規模なCO2排出事業所に対する総量削減義務制度を実施してございます。葛西臨海水族園も対象施設であり、11ページに記載をしましたように、必要な対策を講じているというところでございます。

以上を踏まえまして、22ページの論点につきましてご検討をお願いいたたく存じます。

「役割・機能面」としましては、持続可能な社会に向け伝えるべきメッセージですとか、国内外の動向などを踏まえた役割・機能、世界一の都市を見据えた東京にふさわしい水族館の機能などの観点からご検討をお願いいたします。

「運営面」では、生き物を扱う博物館を運営する上で大切な視点、多くの方に一層親しまれ、魅力ある水族館となるために工夫すべき点、施設の利活用や葛西エリアの魅力向上などの観点からご検討をお願いいたします。

「施設面」では、役割・機能を発揮するために必要な施設性能ですとか、誰もが見やすく使いやすい水族館として重視すべき点、環境負荷軽減に向け考慮すべき事項などの観点からご検討をお願いいたします。

最後に、24ページでございますが、第1回検討会でお出しいただきました主なご意見でございます。

これまでにない新しい水族館像を描くべきでありますとか、周囲との連携を考えるべき、バーチャルではわからないことを伝える必要性がある、生態系とのかかわりを重視すべき、社会教育施設にとどまらないものが求められている、環境教育をしっかりと伝えるべき、人文学的な話を発信できる施設になるとよいですとか、クロマグロの展示に関する事など、多くのご意見をいただきましたので、簡単に取りまとめてございます。

以上、雑駁ではございますが、ご用意しました資料の説明を終わらせていただきます。

○西座長 どうもありがとうございました。参考資料がありますけれども、これは特によろしいですか。

○小林課長 失礼いたしました。参考資料でございますが「第2章・水族園を取り巻く社会状況」の中で、何点か触れさせていただきました資料の参考としてご用意させていただきます。

きました。

簡単にご紹介させていただきますと、参考資料1につきましては、国内外の主な動向を年表で整理をさせていただいたものでございます。A3判1枚になってございます。

参考資料2につきましては、持続可能な開発目標（SDGs）の概要をご用意してございます。

参考資料3でございます。「SDGsアクションプラン2018」これは昨年12月に国の推進本部が発表しましたアクションプランでございます、こちらを一通りご用意してございますが、先生方にはちょっと文字がかなり潰れて読みにくくなってしまっておりますので、直接官邸のホームページから焼き出しましたアクションプランを追加でおつけしてございますので、そちらでご確認をいただければと思います。

そして、参考資料4でございますが、生物多様性戦略計画2011—2020及び愛知目標につきまして全ての目標をまとめさせていただいた資料をおつけいたしました。

以上でございます。

○西座長 どうもありがとうございました。では、そういう参考資料もそれぞれ参考にししながら、これからの議論を進めていきたいと思っております。

ただいま説明がありましたように、本日は3つの側面から、これからの水族園はどうあるべきか、あるいは、都立水族園は何を担うべきかについて議論していただくことになっておりますが、それぞれ3つの側面、非常に密接に関連しておりますので、特にこれについてということをごだわらずに議論していただければどうかと思っております。

それぞれ委員の方々のご専門の分野もございまして、そういうことを含めて、まずはお一人ずつ、今の説明を参考にして、この都立水族園がどうあるべきかについて自由にお話いただきたいと思っております。お一人、5、6分ということをお願いできればと思っております。それが終わってからまた、もう一度皆さんからご意見をいただきたいと思っておりますけれども、まずは順番に、池邊委員のほうからよろしいでしょうか。いつも最初で申しわけございません。

○池邊委員 私のほうとしては、1つは、今、水族園だけの話をしておりますけれども、皆さん前回お訪ねいただいたように、駅から歩いて水族園まで公園があるわけで、1つにはちょっとそこに全く触れていないのですけれども、皆さん見ていただいたように、公園は非常に管理が行き届いていて、そのあたりはいいのですけれども、やはり私は、水族館に行くというワクワク感とか、これからどんな世界が水生動物の世界にあらわれるのかというような感じの導入としては、昔の公園の施設でございますので非常に足りない。

それは別に、何か海浜らしく、まるで宮崎とかそういうような、そんなふうには植えろというわけではなくて。やはり子どもたちでも、大人でも、導入しながら、これから水生生物あるいは水域の生物と触れ合いに行くのだという、何かそういう感じにだんだん追い込んでいく。一番最初は開けていてあれでもいいのですけれども、そういうような公園そのもののリニューアルというのが必要なのではないかというのが1つ、私の公園のほうから

の一番の意見としてはございます。

最後のほうに、非常に美しい夜景というか、夕日が落ちてというところは、見て、あっちに行くとまさに海と一体となった水族館というのが味わえるのですけれども、どうも駅から水族館に至るまでの空間というのがあまりよろしくはないのではないかと思いますので、そこにまずは1つ工夫という、きょうない論点でございませうけれども、必要なのではないかと思います。

その中にもう1つ、やはり今回国会が通ればということですが、森林環境税というか、森林と海との関係性というのが、水源の環境の税の話が来年ぐらいからおりてくるということを考えますと、被災のときにも森林と海が友達ということで非常に話題になりましたけれども、私たち日本人は非常に森林と海が近い関係にあるのですけれども、日ごろそういうことはあまり経験というか、意識していない状況にあります。

ですから、もう1つには森林と海との関係性、それが水源涵養になっている、水が湧き出ているところから海があつて、そのまた海が世界中に広がっていくという、そういうグローバルな意味での、日本国内での森林と海というのと、その海がまた、どうも海洋とか、あるいは塩とか、あるいはそれを昨今ですとウナギがどんなふうに行くとか、そういう広い意味での、鳥や何かは渡り鳥とかというのが子どもたちはよくわかっていますけれども、どちらかというとなら海の中のそういう季節的な変化ですとか、あるいは繁殖に関して、ウミガメなんかはよく皆さんテレビで見えていますけれども、そういう生態系そのものの植物との生息域の生態系はあらわしているのですけれども、そういう1年を通じてとか、そういう意味での海洋の生態系というようなところのものがないのではないかなという感じがいたしました。

あとは、これは非常に下世話な話なのですが、私、公園のほうとか動物園のほうとかをやっていると、やっぱり何かスターとアイドルというのが両方必要で、なかなか水族館の場合には、今までイルカとかアシカとかショーをやっているのがアイドルであったかという考え方もあるのですけれども、やはり旭山ですとか、さまざまな動物の中でも変わってきた展示の仕方を見ていると、違った形でスターとアイドルというのを意識してつくる。スターとアイドルというのは何が違うかというとなら、スターというのは遠くにいますけれども、今回のでいえば非常に大きくて触れないようなものかもしれませんけれども、アイドルがここでいうともしかしてペンギンなのかもしれないのですけれども、身近で、もしかすると名前を言えそうな。

あと、もう1つ、今後のビジュアルの中で足していただきたいのが、音でございませう。映像や何かのものはどんどん変わってきていますし、魚の泳ぐ様子とかもビジュアルで見えているのですけれども、魚もいろいろな意味で言葉を発しているとか、求愛だったり、あるいは脅威を危険とか、そういうものを発したりしていることはいろいろなテレビ等で紹介されていますけれども、映像の中に音が足りないということは、子どもたちにとって特にやはりなじみが、ただ泳いでいるだけが。泳いでいる音だとか、それから、

実は、私、学生を連れて地引網に行ったことがあるのですが、地引網漁もバシバシバシッと魚が、あれは狩猟ですからあまり水族館で好ましい言葉ではないのですが、それでうろこがバシバシこの辺に当たるという体験をしますと、もう学生たち、留学生も含めて、魚というものを本当に身近に感じて、びっくりしたような感じなのですけれども。そのときの音ですとか、そういったものが今回、もう1つ入れていただけるといいのかなというふうに思いました。

最後に、ご要望の中から出ている無料休憩所と子どもの遊び場とか、カフェ・レストラン、これは非常に、1つ間違えると逆にマイナスになってしまう。今、昨今は、我々の業界では民間活用ということでやっておりますけれども、やはり無料休憩所というもののあり方というのですね。無料休憩をしながら、では全然海のほうというか、そういうものを見なくていいのかとか。あるいは、子どもの遊び場というときに、いわゆる幼児が遊べるようなところをこういう片隅に、授乳所もそうでしたけれども、部屋を囲ってそこで遊べればいいのかというと、多分そうではないと。そこでもやはり何か海というものをもっと意識できるようなものがあるといいのではないかなというふうに思いました。あと、カフェ・レストランにつきましても、これはそういう魚を食べるということをやっていいかどうかはわかりませんが、今、大阪のグランフロントのうめきたの中に、海洋大というか、東京のほうの海洋大ではないですね。近畿のほうの……。

○西座長 近畿大学。

○池邊委員 近畿大学が活用しているレストランとかございますよね。ですから、何かもう少しそういう。少し学術的なものも踏まえつつ、海のことをどうやって日本人が営みとして食べてきたかというようなものを知りつつ出せるような、そういう工夫ができればいいのではないかと思います。

あと、最後にもう1つ、私、ニューヨークのMoMAとか、アメリカでは夜の時間、例えば金曜の夜、きょうはモルガンスタンレーの日だよとかというので、ずっと綱がモルガンスタンレーのコーポレートカラーでロープがあれしていて、その日はただだよというようなものがあります。

やはり水族館もこのSDGsのことは非常に民間さん、我々が思っている以上に、人によってはこれは環境教育ではなくて道徳でやるべきだということを民間さんがおっしゃるようなこともございます。

ですから、やはりもっと水族館の夜間利用ですとか、あるいは、雨の日にただにしていただくというようなものもあるかもしれませんが、そういうときに企業さんとの支援をしていただいて、企業と一体になってやっているよというようなことを入れたらいいかなと。

プラス、もう少し調査・研究にも、企業さんの協働みたいなものも、SDGsということ踏まえて入れていければ。それを毎年発表するような機会を設けられればいいかなというふうに思います。

○西座長 どうもありがとうございました。

それでは、海津委員のほうからお願いします。

○海津委員 ちょっと聞き入ってしまいまして。

論点、大きく3つということでしたので、その論点ごとにとりあえず、少しコメントを今一生懸命整理しながら用意していたのですけれども。

まず、1つ目の役割・機能というところで、私も池邊先生がおっしゃったとおり、水息の生き物を伝えるという役割はもうかなり達成されていて、その先の海洋そのものとか、海洋環境というところにもっとアプローチする水族館であるべきかなというふうに思います。

先ほど森のことをおっしゃって、多分「グリーンインフラ」というキーワードを使っていますけれども、それに対しての「ブルーインフラ」というのですかね、水がつかないでくるインフラとしての海というものをもっと大事に取り上げるということは期待できるかなと思います。

ただ、この間お伺いしたのですが、国立の水族館はないということなので……。

○西座長 ないわけではない。国立というか……。

○海津委員 国営ですね。

○西座長 国営ですね。失礼しました。

○海津委員 そうですね、沖縄のほうに。でも、都立と恐らく国立に匹敵する意味合いはあると思うのですね。世界に対しては日本を代表するでないといけないし、日本の中では全国を代表するでないといけないというふうに思いますので。今生態系を環境として展示しているのですけれども「これは日本の一体どこにあって、どこに行ったら見れるよ」というような、全国にまたつながっていきけるような形での、日本全体のブルーインフラを提供するようなものであってもらいたいなというふうに思います。

そうやって見ていきますと、研究面も先進的な研究というか、最先端をここで見ることができる一端であってもらいたいなというふうに思いますので、もうやっていらっしゃると思うのですけれども、ジャムステックでリアルタイムでやっているものがここで見られるとか、そういったことでのつながりがあってよいかというふうに思いました。

冒頭に定義で博物館の4つの機能とあったのですけれども、恐らく「種の保存」と「教育」がインプットとすれば、「調査・研究」と「レクリエーション」がアウトプットなのだろうと思うのですね。だから、保存にしても研究にしても、全てが教育でありレクリエーションになるというふうに思います。これが1つ目の機能というところに関しての私のコメントです。

2つ目が「運営面」ということだったので、これもやはりつながりかなと思うものは、地域の中での葛西水族園の位置づけというものをもう少し、回遊性という面から見て、この水族館も含めたこの一帯を人々に回遊してもらおうときに、ここの水族館は何が提供できるかという位置づけで見ていくとよいかと思います。1日とか、周辺にホテ

ルもありますので、1泊2日で水族館を利用してもらおうという、そんなところでの、観光になるかもしれませんが、役割が果たせるかなと思います。

海外とのつながりでいいますと、先ほど池邊先生のほうからもレストランのお話が出ていたのですが、お寿司が人気があるのですね、やっぱり外国人には。寿司ネタは何なのかということが、ここに来ると「あなたが食べているのはこれですよ」というのがわかるというつながりはとてもおもしろいかなというふうに思いました。

そういうことを考えていきますと、3番目の「施設面」に関しては、恐らく老朽化のこともありますので、かなり大胆なリニューアルが必要だと思うのですね。ちょっとこの議論をしていく間に、同じ場所で建てかえをするのか、移転を含めてなのかということを考える必要があるのかなというふうに思いました。これ今回の資料には入ってはいないのですけれども、かなり大規模な改編ですので、その場所の転換ということもちょっと視野に入れる必要があるかなと思います。

そのときに、先ほど無料休憩所の話が出ていたかと思うのですが、今の園内の構造を見ますと、無料休憩所に子どもたちがたどり着くには遠くの駐車場に車をとめてかなり歩いてこなければいけないという、ちょっと不便ですよ。

○西座長 アクセスが悪いという。

○海津委員 アクセスが悪いですね。暑いとき、寒いとき、雪のとき、雨のときどうしたらよいかということにも、恐らくそこら辺があると思いますので、そういったこと、施設面からのハードのときの1つ要件かなと思います。

あと、余談なのですが、この葛西の水族園の海浜のところがかつてあたりからバリアフリービーチの取り組みが始まるということを知っていて、身体障害者の方が海に出られるようなサービスをする試みがあるそうですので、そんな人々との連携で水族館を見たときに何が今欠けているのかという評価の方法もあるかなと思いました。

以上です。

○西座長 どうもありがとうございました。

それでは、川廷委員のほうからお願いします。

○川廷委員 川廷です。資料を拝見して、展示のコンセプトはあったのですが、施設全体のコンセプトという記述がなかったので、そこが1点気になりました。

例えば、展示の中身というのはいろいろと深掘りをしていくことになると思うのですが、まず施設そのものが、1つキーワードで考えられるのがランドスケープということは大事かなと。ランドスケープというのはただ景色ということだけではなくて、生態系のミクロのつながりと、それから、東京湾のどこに位置しているかという大きな意味でのマクロのランドスケープの視点。先ほど先生方がおっしゃった流域の視点ですよ。流域思考と慶應大の名誉教授の岸先生がよくおっしゃっていますけれども、さっきの水のつながりのお話。そういったところで考えたときに、今この葛西の立地が、例えば「電車で行くとなかなか距離があって、東京都心から遠い」とかいう言い方をしますけれども、でも

東京湾を俯瞰して、東京の流域ということを俯瞰したときにはものすごくいいポジションにあるのですよね。そういうポジティブなコンセプトワークというのが必要なのではないかなと。いわゆる施設のコンセプトですね。

そうなったときに、全体を俯瞰したときに、当然地域の歴史、文化ということに深堀りがきますので、当然江戸前の話も出てきますし、その立地の問題というのがすごく大事なコンセプトとしては必要になってくるのではないかと。

そうすると、非常に新しい視点をつくることができるという、1つテーマ設定になっていくと思うのですけれども、これまで見えていた東京という風景が、葛西の施設に触れることによってまた見え方が変わってくると。つまり、見えないものが見えてくる。まさに生物再生のつながりだと思うのですけれども、そういうことを学べる施設でもあるということの、大きな施設としてのコンセプトというのが大事なのではないかなと。

例えば、ラムサールの話もありましたけれども、ラムサールで一番大事な、例えば渡り鳥、僕、種類のことはよくわかりませんが、よくおっしゃるのは、渡り鳥の渡ってくる向こうの地域の物語を鳥が運んでくると。私たちがここで渡り鳥が暮らしているその暮らしを守らないと、渡っていった先の地域に迷惑をかけるというような、こういったつながりも例えばラムサールの中では語られたりしているのは聞いたことがあります。

ですので、見えないつながりというのはどこまで広がるかということ、結局世界に広がっていくと思いますので、日本の生物再生を考えると、食卓の命というのは世界から供給を受けているわけですから、魚も同じですね。そう思いますと、葛西の持っているコンセプトは東京ならではの持ち味と、もう1つ、その世界のつながりをしっかりと伝えていく、まさに日本の中心地である東京から水の物語というのを伝えていくような大きなコンセプトというのが描けるのではないかなというふうに感じました。それが生物再生でも非常に重要だと思いますし。

あと、施設の問題としても、ターゲットの設定だと思うのですね。子どもの視点を育むということも大事ですし、先ほどのバリアフリーの問題、誰も置き去りにしないというSDGsのことを考えますと、身体障害者、ハンデのある方々に対しても開かれた施設であるべきですから、ターゲットをそれぞれ細やかに考えていかなければいけないのではないかな。要するに、幅広いターゲットに対応できることを考えざるを得ないのではないかなというふうに思います。

もちろん水族館だけの施設だけではなくて、海水浴ができるというのはきょう初めて知ったのですけれども、水辺が実は海水浴も可能だということであるとより体験ができる広がりがあるなと思ひまして、さまざまな体験の入り口になるこのエリアという形でのランドスケープという視点もあるなと。いわゆる実体験、リアル体験。ですから、無料休憩所とかそういう言い方ではなくて、実は体験しながら休憩できるような場所というのが当然つくっていいのではないかと。パラソルが立っているだとか、ちょっとわからないですけども、そういうふうな形で、わざわざ「無料休憩所でございます」ということではな

くても、海とか水とかに接しながら、実は足を水につけるだけでも休憩になっているかもしれないし、そういう体験をしながら休憩できるようなものをこの葛西が提供できる。世界を見ても「葛西は非常にユニークな、さまざまな取り組みがあるね」と言われるようなものがまだまだ開発できる余地が十分にあるなというのを感じました。

SDGsというのは統合的アプローチということを言われていまして、全部のターゲット、個別ターゲットなのですけれども、全てがつながりあっているという視点を持つことが大事というふうにいわれていて、例えば、直接的には生物再生でいうと14番、15番なのですけれども、これをするによって教育ですとか、福祉、健康ということにアプローチしますから、14、15、3、4というのは出てきます。

それから、施設としての取り組みをすれば当然エネルギー対策とか気候変動対策ですとか、あと、9番の「イノベーション」にもかかわってくると思うのですね。そういうものも入ってきます。それから、こういう施設をそういった大きな俯瞰をすることによって東京というまちに対する認識を変えることができますので、11番の「住み続けられるまちづくり」にもかかわっていけるでしょうし、水のつながりや生き物の、いわゆるごみの廃棄の問題とかそういうことを考えると12番というのも出てきますから。

あとは、こういった施設で働けるということで働きがいですとか、もちろんジェンダーバランスということですか、そんなふうにと考えると、このSDGsのターゲットでも10以上のターゲットがこの施設で達成できることになってきます。

SDGsは、そもそも取り組んでいることを棚卸するだけではなくて、ここで新たな、そのSDGsを見て改めて自分たちで2030年の目標を設置して、それに向けてこの施設のあり方ということを考えることになりますので、今言ったような複数の統合的なターゲットをアプローチをして、この施設が一体どういうゴールを描くのかという、いわゆるバックキャストですよ、そこも考えていくヒントになると思いますので。前回はムーンショットという言葉をお話しましたが、「え。そんなことできるの？」ではなくて、「こういうことができるといいね」という夢を描くと。でも、それが実際にアポロが月に行ったわけですから、我々の持っている技術とか知恵でそういった2030年の葛西のあるべき姿を皆さんと議論することで、すてきな施設のイメージができるといいのではないかなと改めて思いました。

以上です。

○西座長 どうもありがとうございました。

では、木下先生のほうからお願いします。

○木下副座長 それでは「役割・機能」「運営」「施設」という、この3つの論点ということで、ちょっと1つずつ申し上げますが、やはり役割・機能を考えることがこの会議でも一番重要なと思いますので、ちょっとそれを後にしまして、「運営」と「施設」のほうからお話しますが、「運営」に関しては、この委員会での優先順位が低くていいのではないかなというふうには思うのですね。今、お話があったように、やっぱりこの葛西水族園が何

をやるところなのかということの練るべきだなというふうに思います。

現実問題として、今指定管理者という形で運営されていますので、その問題点を検討するという、そういう何か具体的な作業は必要かと思えますけれども、ここで示されている運営のあたりは、ある程度お金があればできることではないかなとも思うのですよね。サービスをもっとふやしていくというのは。

施設に関しては、先日見学させていただいて、やはりバリアフリーはもっと優先順位を上げるべきだと思います、この検討の中で。この中にも、要するに持続可能性というものを目標にした社会というものをつくっていかうというときに、13ページにもありますが、「誰一人取り残さない」社会の実現というのを掲げるのであれば、真っ先にエレベーターをふやすとか、もう具体的なところは、施設に関してはやっぱりやるべきだと思うのですよね。

ただ、長期的な、新しい水族園の姿を考えていかうということですから、その場合は先ほどからお話が出ているように、やっぱり立地というところからもう1回考えるという、その検討は当然必要だと思いますが、バリアフリーの優先順位はもっと上げるべきではないかというふうに思います。

最初の「役割・機能」に話を戻しますけれども、最初に示された3ページのこの4つの機能ということなのですが、これは、私は前から4つを並列にすること自体にすごく違和感を持ってきています。動物園でも水族館でもこれはすぐに出てきますし、JAZAのホームページを開くとやっぱり最初にこれが出てくるのですが、結局何でこれが4つが並列で示されるのかというのがよくわからないのですよね。先ほど海津委員がおっしゃっていましたけれども、この4つというのをどういうふうに関係させるのかというのを考えるべきだと思います。

私自身は、ここにまず「調査・研究」が並列にあるというのはもう全くおかしいと思っていて、前から。これはもうベースですよ。全ての基盤に「調査・研究」がなければいけないというふうに思っています。

「種の保存」それから「教育」「レクリエーション」はいいのですけれども、これを博物館施設ということで考えていったときに、博物館法に基づいての施設だということなのであれば、やはり社会教育というものが大きく出てくる。ただし、先ほどの説明にありましたように、博物館法の中できちんと位置づけられてこなかったというところから、もう少し環境というもののほうに今シフトをしてきているので、そのあたり、社会教育施設であるというものをどこまで出していかうのかというのも問われるとは思いますが、いずれにしても教育というのがやっぱり非常に重要だと思います。

それから、「種の保存」はもちろん大きな機能として当然だと思いますが、この「レクリエーション」というのがちょっと使い古されてしまった言葉だなと思うのですが。この言葉の本来の意味にもう1回立ち返るといって、そうするとやっぱり「Re」と「Creation」ですので、この「Creation」の意味とか、あるいは、それをもう1

回「Re」という、そういうことから、もう一度この4つの機能というものの関係を練り直すということが必要なというふうに思うのです。

レクリエーションはすごく重要だなと、もう1回何か人間がそこで、この場合は水族館で、もう一度自分を取り戻すといいますか、自分は人間であることをもう1回確認するみたいな、非常に創造的なものになると思うのですよね。

私は去年から静岡県立美術館の館長を兼務しているのですが、美術館にももちろん同じような役割が求められているのですが、ちょっと私は美術館を20年前に離れて、20年ぶりに美術館に戻ったのですが、美術館に求められるものが20年前と随分変わっているのですね。簡単に言ってしまうと、今求められているのが楽しさなのですが、それはいい面と悪い面があると思うのですけれども、私が今館長を務めている美術館というのは、1986年にできている。これは葛西と近いのではないかなと思うのですが、30年の歴史があるのですね。例えば、金沢の21世紀美術館というのが2000年代に入ってからできましたので、まだ十数年と。当然、その時点での望ましい美術館像というのは反映していて、金沢に行きますと、毎年1回行く機会があるのですが、あそこにタレルの部屋とあるのですね。これは、アメリカのジェームス・タレルという人のデザインで、そこに入りますと、天井に四角く窓が切っただけなのです。そこでただ空を見ると、正方形の四角い空。私は冬に行くことが多いので大体どんより曇っているし、大体雨が降っていて、美術館の中に雨がずっと降っているのをそこでじっと回りに椅子があっただけなのです。美術館は外からの環境を閉ざして作り上げてきた空間なのです。一切外と隔離させてきたという。そういうものに穴をあけることによって、やっぱりすごく、たったその四角の、これはデザインだと思うのですが、そのことによってふだん気づかないものをもう1回気づかせてくれるというような。

だから、もう水族から海洋へということをおっしゃっていましたが、私も本当にそう思っていて、水族から海洋へということに展開していくということは間違いないと思いますし、その海洋も山とつながっているとか、あるいは都市とつながっているというようなことで、そういう大きな問題に目を向けていけるような施設というものを目指すべきかなというふうに思うのですね。

前回の意見の中に、人文学的な話も発信できる施設になるといいという意見がありました。これは私ではないと思うのだけれども、多分ほかの委員の方だと思うのですが、必然的に水族から海洋へといったときに、人文学的な話。例えば、それはもう政治的な問題まで視野の中に入らざるを得ないなというふうに思うのですけれども、どこまでそれに触れるかは別としても、そういう世界について考える。環境は、やっぱりそういうことだと思うのですね。

もう随分前なのですが、東大でちょっと公開講座で、境界線という大きなテーマでやっていたのです。毎回ゲストを呼んで。それは東大の先生だったのですが、国際政治学者で。海洋の境界線と、それから、宇宙空間の境界線。地上には国境というのが明確に引かれて

いるわけですが、それが非常に海の場合だって当然ですが曖昧になっていくし、南極というのはどうやって国際的に管理しているのかとか、そういうところにまで広げていける施設だと思います。ですから、どこまでやるかというのはこれから練っていけばいいのですが、そういう可能性を閉ざさないといいますかね。

そうなったときに水族という言葉はこれからも持ち続けるべきなのかどうか、この辺が。もう日本社会の中に水族館とか水族園は定着しているけれども、あまりほかで使わないような気もするのですよ、水族。とって、海洋館となるとまたちょっと違うような感じもするし。その辺は、やっぱり最初のコンセプトを練るとのことかなというふうに思います。

それから、あとちょっと具体的な話では、なぜ都が水族館を運営すべきなのかということを考えるのであれば、ちょっとこれ具体的な作業として都内の水族館との徹底的な比較というのは必要かなと思います。それから、動物園との関係ですよね。動物園との関係は先ほどちょっと幾つか示されておりましたけれども、でも、これは環境、あるいは生態系というのを考えたときに当然重なり合っていく問題ですので、東京都の中での4園のすみ分けというよりも、この葛西のところにこの問題をどこまで一緒に考えていくのかということも必要かなというふうに思います。

ちょっと動物園との関係というのを考えていくときに、動物福祉という言葉が、何かこれには出てこなかったように思うのですが、やっぱり動物福祉の問題は、動物園のほうではものすごく大きいと思うのですよ。水族館のほうだとイルカ問題というところに収れんしてしまっているのだけれども、この問題もやっぱり視野の中に入れておかないといけないうふうなふうに思っております。

ちょっと、大体以上です、今のところは。

○西座長 どうもありがとうございました。

それでは、佐藤委員のほうからお願いします。

○佐藤委員 もう既に十分お腹がいっぱいになるぐらいいろいろおもしろい議論をお聞かせいただいておりますけれども、ちょっと私、少し視点を変えまして、本当に東京都がやるべき水族館としてどのようなメッセージがあるのか、あるいはどのような新しさがあり得るのかというふうなところからちょっと考えてみたいと思います。

前回の会議のときにも、やっぱりせつかく東京都がやるのだから本当にこれまでになかったような、世界が目を見張るような、こんな新しいやり方があったのかというような水族館というのが望ましい。その場合には、恐らく今の議論にもありましたけれども、水族館という名前がつかない可能性は当然あると思います。

それにしてもそういうふうな視点に立ったときに、1つは、今日の資料のご説明を伺いまして、やはり葛西の、今までの実績の中に明瞭な強みが明らかに1つある、ということが見つかったような気がしております。それは、どこまで実現できたかはともかくとして、葛西が非常にこだわって生態系の視点で展示しようとしてきたことです。これは私も経験

したことでございますけれども、葛西の展示は一つひとつの水槽中に入れる魚の種類に関して、例えば、ベーリング海という水槽がありましたね。特定の海域の水槽があったら、本当にそこにいることになっている魚以外は絶対に入れないということに徹底しているのです、これが。カリブ海だったら、本当にカリブ海に生息している魚しか入れない。それが、生態系が大事だという思想だったわけですね。

先ほどから何人かの方がおっしゃっていたように、流域の生態系とか、海と森とのつながり、あるいは海自体の中でも生態系として見ていこうということは、いろいろな形で葛西も挑戦してきたし、ほかの水族館も挑戦してきたと思います。

ある意味で、そういった生態系のちょっとした小さなバージョンを水槽内に再現するか、展示の中に再現するかという試みはいろいろなされていて、かなり実現できている。例えば、サンゴ礁の生態系の展示などでかなり技術開発もできているのですが、多分いまだかつて見たことがないのは、本当に海の中の主要な生態系がリアルに、しかもその裏側にあるメカニズムまで含まれた形で再現されているような水族館です。そういうリアルな生態系が再現されている水族館というのはあまり見たことがないなとか、多分これが本当に今水族館に求められる最先端の1つなのではないだろうかというふうに思って話を聞いていました。その件に関しては、葛西は少なくとも、コンセプトレベルでは明らかに世界に先行してそれをやってきましたし、恐らく強みはあるだろう、技術的にも高いだろうと思いました。

そこが仮に新しさだとしたら、つまり、生態系が本当に見事に再現されているような、展示にあふれた施設というものが世界に誇れる新しさだとしたときに、そこに込められるメッセージというのは、まさに生態系と人間とのかかわりであり、SDGsの達成であろうと思います。ですから、SDGsの達成に向けて、人と海、そして海洋と有機的に連関している陸域の生態系との関連性に関して、多くの方がそれをリアルに体験し、学び、そして、考え方を発展させていくことができるような、そういう施設でありたいと思います。東京都はそれを通じて海洋を中心としたSDGsの達成に最終的には貢献するのだというふうなメッセージが、非常に明瞭かつわかりやすいのではないかなと思います。

そのときの生態系の視点の1つの課題は、生態系というのは複雑系でございます、仮にかなりその複雑系が目の前にあったとしても、どこから見たらいいのかさっぱりわからないということです。何をしているのかですら多分、私にもわからないと思います。ですので、その状態からどのような形で意味を引き出すかというところに、まさに水族館の重要な教育機能があるのではないのでしょうか。

つまり、現実にある非常に複雑な人間と生態系のかかわり合いについて、それをどのような視点から捉え、考えていくのが意味があるのか、ということが伝わるような教育というあり方が十二分に考えられるのではないかというふうに思っております。その意味で、例の4つの機能の中の教育の機能、特に人と自然のつながりにかかわるような教育の機能というのが非常に大事なのではないかと考えることができると思います。

今までのご議論の中で、その生態系の展示に関しまして、施設のランドスケープという視点は非常におもしろかったのですけれども、東京都として、東京のランドスケープの中での流域というものを考えていこうという発想は、これは非常に重要でして、それが1つの大きな核になると思うのですけれども、ただ、一方でそれだけですと、ある意味ではこれは先例がいっぱいございます。例えば、モントレイ湾水族館がその最先端をかつて走っていたわけですが、1つの地域の生態系を可能な限り詳細に水族館という施設の中に再現するというアプローチは、モントレイ湾に始まって、南アフリカのトゥー・オーシャンズとかいろいろなところでもかなり突き詰められた。日本でいいますと、琵琶湖博物館が典型的です。

ですので、その先を見ないといけないなと思っております。東京の流域の生態系というものは1つの要素として当然取り入れるべきものであり、そこからインターナショナルメッセージがいろいろ出せると思うのですけれども、それ以外にもっと多様な生態系を世界各地の特定の生態系をモデルに、世界各地にするか、どこまで広げるかはともかくとしまして、特定の生態系をモデルとして一つひとつ再現していくというふうなやり方がある得るのではなかろうかと思えます。

そのように考えますと、恐らくこの4つの機能の中での「教育」というのが非常に大事であり、そのときにその「教育」の軸となるのは、人と海のつながりを生態系の視点からしっかり主張できるような、そういうふうな水族館というのが大事なのではないかというふうに思えます。

この動物園水族館の4つの機能のバランスというのは、私にも、ものすごい違和感がございまして。今、私が主張したことは、まさに教育こそ最も大事なのではないかという主張でございまして、その際に、「調査・研究」が根本にあるのは当然でございまして、そうなってくると、水族館のやるべき「調査・研究」というのは何かというときには、その「教育」に資する「調査・研究」が非常に重要な要素になってくるだろうと思えます。

それから「種の保存」あるいは「環境保全」に関して申し上げますと、恐らく希少種を細々と飼うというのは、「環境保全」という文脈からすると大きな意味はほとんどなく、むしろ積極的に考えるべきは、その希少種の本来の生息域の再生です。だから、東京都がやってまいりましたアカハライモリの取り組みなどがまさに、本当にモデルになるべきものだろうと思えますし、これについてどこまで突き詰めることができるかというときに、これまた先ほどご議論が出ましたように「今あなたが見ているこの展示というのは、世界のこの場所が再現されていて、その場所では、例えば希少種保全に関してこのような問題が発生しており、それに関して葛西臨海水族園がどのような形で貢献するのかというふうなところが見える」というふうな、そのようなつながりがしっかりつくられることで、「種の保存（環境保全）」に関する貢献も達成できるのではないかと。

それからやはり、非常にある意味では心強いのは、世界の1つの流れとして、「教育」は非常に重要な保全活動であるという、そういう流れができ上がっている。まさに「教育」は

1つの保全活動なのであるという位置づけのもとに、教育活動に最大限の努力を注入していくことが大事なのではないかと思います。その際にレクリエーションとしての楽しさも十分に持っているような、そういう教育活動というのを設計することが大事なのではないかと思います。

最後ですけれども、教育のための展示ということを考えてときに、その最終的な目標は人と海のつながりに関する理解を深めることだというふうに申し上げましたけれども、葛西が割と初期から強く意識してやってきたことの1つに、「科学的な観察」がございます。科学的に物事を見て考える。水族館が提供できる最大の教育資源は、実は生きた生物あるいは本物の生態系を見ることができるといことです。観察の機会を提供できるということだというふうに思っております。観察は、その背景にある知識と、それから、ものの見方がないと意味をなしません。ぼーっと見ているだけでは何もわからない。ですので、観察のための視点を提供する。こういう目で見たらどうだろうという、言ってみれば認識の枠組みを提供するというのと、それから、どこを見ればよいかという、それが意味することは何なのかということが伝わるような展示であるべきだろう。

つまり、まさに生態系というものが丸ごと再現されていて、そこにどのような視点で見ればよいかという情報が一緒に載ってくるような展示というふうなもの実は大事なのではないかというふうに思います。

済みません、長くなりました。この辺にしておきます。

○西座長 どうもありがとうございました。

では、千葉委員のほうからお願いします。

○千葉委員 委員の千葉でございます。観光が専門でして、生物だとかそういったことが不得手なのですけれども。今お話を伺っております、私、おとといイギリスから帰ってきたばかりでまだ時差ボケなのです。夕べ、よく寝れません。ロンドン水族館を見てきたかったですけれども、閉館の時間になっておりまして、ウェストミンスターのところまで行って、周りだけ見てまいりました。

恐らく、先ほどユニークベニューという言葉も出ましたけれども、この交流人口の増大を目指して新しい葛西の水族館のあり方ということが重要になってきているのかなというふうに思っております。

ちなみにロンドン水族館、英国政府観光庁のほうとも私も長年いろいろとおつき合いをしているのですけれども、例えば、オンラインで事前に予約をすると40%もオフになるとか、それは英国政府観光庁のホームページ上でございます。それから、「介護者1人は無料にするよ」とか、あと、バックヤードツアーを具体的に、幾らで、何分間で、どういうことを見せるということ載せていたりしております。もちろん日本語のサイトもございます。

そういったところで、先ほど先生からも運営面はお金があればというご意見もございましたけれども、もし交流人口増大ということであくさんの人を呼び込むということであれ

ば、そういったこともあらかじめ考えて、想定して、立て直すということになるのかなというふうに感じております。

本来、今回学内研究だったものですから、ほかの先生方も一緒に、湖水地方の研究だったのですね。それで、湖水地方はご存じのとおり、ビアトリクス・ポター、ナショナル・トラストで有名な場所、私も、実は湖水地方は初めてでございました。本当にイギリスのよさというのは、古いものほどよいと、古いものを残すという、そういう世界の中で、やはり東京はスクラップアンドビルドというところがあるかなと感じます。今回もし全てのものを取り壊すということであっても、歴史的なことも先ほどお話にございましたので、一部何かどこかに残すということが必要なのではないのかなと、ちょっとお話を伺って感じてました。

湖水地方は、ピーターラビットの作者の方が、その景観を守るために買い占めて、鉄道も入れずに、固有種の羊が今でも残っていたりとかということで、そういったものを見て回ったわけなのですけれども、そういった自然との共生にはかなわない部分が施設にはあるのかなというふうにも感じました。

例えばなのですけれども、ユニークベニューという言葉、観光に携わられない方には聞きなれない言葉かもしれませんが、そこを会場にウェディングだとかパーティをやるとかというようなことで。例えば、そのためにわざわざ広いスペースを屋根つきでつくるのではなく、お庭にマーキースタイルといいまして、テントを張って、よく海外でやっておりますけれども、それからあと、イギリスにあるようなフットパスですか、散策路だとか、そういったものがちょっと参考に、帰ってきたてのかぶれで申しわけないのですけれども、感じたりしたところです。

やはり、例えばナショナル・トラストでもいわれておりますけれども、ドネーションとか、寄付を募るとか、それからあとお金を落とす仕組みということで、いろいろな水族館でぬいぐるみをたくさん、大きいサメのぬいぐるみとかいっぱい売っておりますけれども、そういったものを戦略的につくっていくのも必要かなというふうに感じました。

あと、冒頭お話がございましたけれども、ナイトタイムエコノミーという、夜の観光消費でございますね。今、そこにすごく注目されているかと思います。日本は、居酒屋とか、そういったものはあるけれども、夜健全に子どもを連れていける場所が少な過ぎるというご意見。その中で、ナイトズーだとかをシンガポールだとか、そういったところはやっていますけれども、夜行性の生物もいると思いますので、そういったものが見れるのが、常設でなくても、常時でなくてもあったらなおすばらしいなど。

日本で一番、世界で一番ということであれば、他国の水族館との比較も必要になってくるのかしらというふうに思いました。

勝手申しました。以上です。

○西座長 どうもありがとうございました。

最後になりましたけれども、鳩貝委員のほうからお願いします。

○鳩貝委員 もう既に皆さんいろいろとお話いただいたので、言うことないのですけれども、教育関係ということで委員に加えていただけたということは非常にありがたいことだなというふうに思っております。皆さんが「教育が非常に重要な役割をするのだ」ということをたくさんお話しされましたので、私がもう申し上げるようなことはそんなにないのですけれども。

水族館、それから、動物園といいますのは、一生の間に何度も行くところなのですよね。子どものときに、親に連れられていく。ある程度大人になっていく中で、楽しくデートでいく。そういう場でもあり。結婚し、家庭ができますと子どもを連れていく。子どもたちが卒業といいましょうか、出ていきますと、1人ないし2人残されまして、癒しの場として水族館、動物園というのが必要になる。シルバー世代にとっても非常に重要な場である。

ここの4つの機能の中にあります「教育」という場合には、これ学校教育がすごく重視されているわけですが、生涯教育、生涯学習の場として、僕は非常に重要な場であると。先ほど社会教育の場というお話がありましたけれども、まさにそのところを大事な基本線に置いておくべきであろうというふうに思います。

そういう意味からいいますと、きょう出席いただいている部局の皆さんを見ますと、教育の部局からは1人もおいででない。ここが役所の縦割り行政の一番大きな問題であって、いわゆる担当部局だけでこういうものをつくっていくのではなくて、やはり関係部局の連携を十分にとって、よりいいものにしていくという知恵を出し合うということが非常に重要だろうというふうに思います。その部分が、今後、非常に重要なことになるのではないのかなというふうに思います。

次にですが、役割が時代とともに変わってくるというお話も先ほど何人かの委員からいただきましたけれども、環境問題とか食料問題も、身近な問題から、今、地球全体の問題にどんどん広がっていく。先ほど宇宙という話も出ましたけれども。そういうものは、今バーチャルな時代になって、何でもそういうもので見られる時代にはなっているのですけれども、大事なことは、実体験を踏まえて、学んで、きちんとした科学的な知識を身につける。それから、そういう課題解決の方策を身につけていくということが非常に重要だというふうに思います。

そういう意味で、体験をし、知的に学び、そこから問題解決をするというような場でもありますので、施設面でもそういうことができるようなことを考えていっていただきたい。そのためには、レクチャーの空間ですね。それから、実験観察等もできる空間、そういうものもぜひしっかりとつくっていただいて、先生方、それから、子どもたち、一般市民が勉強できる。そういうことを伝えられる。直接見ながらだけではなくて、まとめて伝えられるようなレクチャーの部屋というのがどうしても必要だろうというふうに思います。

それと、先ほど無料休憩所の話が出ましたが、学校関係者からしますと、学校で見学に行くときに、必ずトイレ、それから、雨の日の昼食の場、休憩の場があるのかどうなのかというのが非常に重要なのですよね。意外と、これがない施設が多いのですよ。ですから、

優先して学校で考えるのは、そういう場があるかどうか。「今日は雨だからやめましょう」というわけにはいきませんので、そういうことも含めて、子どもたちが、学校でまとまってきた、勉強ができる、そういう場になるように、もう少し工夫をしていく必要があるのではないかというふうに思います。

先ほど木下先生だったかと思いますが、単なる生き物を見て遊んでではなくて、それがどういう環境なのかも含めて勉強していく場であるとの話がありましたが、命の問題、そして道徳教育にまでみんなつながっていく非常に重要な場だと思いますので、そういう学校教育との位置づけは十分考えていただきたいなというふうに思います。

それから、施設の面でいうと、バックヤード。ただ単にバックヤードを見せるのではなくて、小学生的には、お魚さんの環境と自分たちの環境をちょっと比べてみてもらう。今、君が、あなたが、おうちの中で食べる場所、それから、寝る場所、排せつする場所、分かっているよね。空気もエアコンできれいにしているよね、温度を調節しているよね。お魚さん、どうなのだろう。分かれていますよね。全部一緒ですよ。見た目に水がきれいならば、もうきれいだと思っているわけですよ。ところが、水はすごく大きく変化しているのだ。そういうことも含めて、何でバックヤードでこれだけ大事な仕事をしているのか。魚の住む環境を毎日の同じような状態にするということは大変なのだよ。そのためにこういう施設があるのだよということを、ちゃんと子どもたちに伝えるし、餌を与えることも含めて、親子でそういうのが学べるように、バックヤード見学をもっと自由できるようにお願いした。ほかのある水族館などは別にお金をとって見せていますけれども、それでもいいのですけれども、きちんと見られるような場所をぜひ提供していただきたいなというふうに思います。

あと、運営面、指定管理者制度は今後どうなるのかわかりませんが、ぜひ教育関係の人の育成をお願いしたいなというふうに思います。そういう人を配置していただく。それをやらないと、教育というものは、看板に掲げても、本当にその教育ということができるのかどうなのか。それぞれ専門分野の仕事が皆さんあるわけですから、その方に「教育もやってね」ということは、難しいだろうというふうに思います。そういう意味で、教育普及等にかかわれる人をきちんと入れていくということも必要かなというふうに思います。

そのほかいろいろお話したかったことがあるのですが、皆さんほとんど言っていただけたので、私のほうからは以上です。

○西座長 どうもありがとうございました。

本当に皆さん、いろいろ言っていただいて、私もお腹がいっぱいというような感じなのです。私のほうから特につけ加えるようなこともないような感じがするのですけれども、少しだけ、いろいろなところで見聞きしたことをちょっと。

今の無料休憩所のあれで、私、随分前なのですけれども、ロンドンの自然史博物館の地下だったと思うのですけれども、学校教育で来た人たちが、すごく広いところで、机が並

んでいるだけなのですけれども、そこに荷物等を置いて、それで必要なものだけ持って、向こうは寒いので、コートをかけるところは別にあって、荷物はそこに置いて、それで館内に行く。それが次から次に来るのですね。ちゃんと係の人がいて、この学校はこの区域、この学校はこのテーブル、ここからここまでのテーブルというふうに毎日分けてあって、次から次に来て、どんどん行く。年間何十万人もの学校の子どもさんが来て勉強している。そういうところが、日本ではまだないのですよね。

やっぱり東京は人は多いから無料休憩所はあまり評判がよくなかったですけれども、そういうようなことができるような施設があれば。せつかくすごいお金をかけてつくった施設が有効に活用できるのではないかなというのは、1つ思いました。

それから、フランスのラ・ヴィレットといったかな、科学博物館の。あそこは何か職業教育をしているというようなことを聞いたのですけれども。それで、失業者がそこに行って、職安みたいな感じで就職案内を見ていくのだと。私、博物館のことをずっとやっていて、とんでもないというか、こんなことを考えるのかというか、そういう、私の想像外のことをやっている、そういうところがあってびっくりしたのですけれども、皆さんの意見を聞いていて、そういうようなことも、どこまでできるかわからないですけれども、水族館という今までの概念ではなくて、非常に広いものを持ってやっていけばいいものができるのではないかなというふうに思いました。ということで……。

○池邊委員 最初言い出しっぺだったので、ちょっと1つだけ、皆さんが多分言わなかったことで。

先ほど佐藤委員がおっしゃっていたときに、さっき私、スターとアイドルみたいなのを言ったのですけれども、一番わからないのが、例えば、私はアカハライモリです。どうやって生まれるのですかと。どこで、どうやって生まれて、何を食べて、何をどれぐらい食べて毎日暮らして、どれぐらいたつと成熟して、ペアリングとかができるようになって、それが、先ほどの生態提示でいうと、どういう水温のところ、どういう葉っぱの陰に例えば卵を生むとか、あるいは砂浜に行って卵を生むとか、何か毎日、あるいは一生という、誰かが主人公になって、毎日、一生、そしてそれが、例えばウナギだったら世界を回ってくるとか、鮭だったら川を上がるとかと、そういうのもあるのですけれども、そういう何か、割と哺乳類だとわかるのですけれども、どうやって暮らしているのか、それがなぜどのぐらいの温度で、どういう葉っぱがあってという、生態系を再現している中に、何かそれぞれの動物の中で幾つか具体例で、それが主人公になった物語みたいな、ストーリーみたいなのが展開されて、そういうものが無料休憩所とかで映し出されたり、耳から聞こえたりすると、より生態系展示をそんなに説明しなくても、なるほどというようにわかるのではないかなと思いましたので、ぜひそういう、何か主人公にしてあれしていただきたいなと思います。

○西座長 どうもありがとうございました。

時間も大分迫っておりますので、それでは、事務局のほうから、きょう欠席された小林

委員の意見ををお願いします。

○小林課長 それでは、事務局より小林委員のご意見をご紹介します。

まず今回の検討に当たりまして、SDGsのような目標を持ち、方向性を検討するということは適切だと考えますというお話をお聞きいたしました。

また、多言語化、4言語化は、国立博物館でも課題となっています。解説板が多くなると展示作品が引き立たないことも懸念されます。表示の仕方はよく考える必要があります。

来園者増を目指すのであれば、目標数値と、それに見合った施設規模が必要です。混み過ぎると施設や展示を十分に楽しめず、来園者にご満足いただけないことになります。また、入館料で採算をとるということはなかなか難しいですが、よりよいサービスを継続的に提供して来園者をふやす取り組みは進める必要があります。

事業の効率化やサービス向上の観点から、入館料収入と、それ以外の利活用収入等を別に管理するとよいかと思えます。ただし、収入がふえると一般管理費が削減されるというようでは問題が生じます。創意工夫で得られた収入は、インセンティブとして運営者が自由に活用できる仕組みがあれば、さらなるサービス向上に結びつけることができると考えます。

また、観光の視点は重要です。観光客を誘致するような施設の利活用に取り組んでいくべきです。

また、スタッフの持続可能性も考える必要があります。施設の魅力やサービスの向上で来園者がふえると、業務量も同じようにふえます。適切な人員配置がなされないとスタッフが疲弊し、よいサービスを継続して提供できなくなるため、留意をする必要があります。

最後に、施設性能についてです。博物館は具体的な利用方法を想定しながら、各機能が有機的につながっていることが好ましいと考えます。博物館は、展示作品がある場所と、それを見る人がいるだけの空間をつくれればよいというものではありません。豊かな体験を提供するという目的が達成できる空間づくりを行うべきです。フレキシブルに使い方を変えられるということも必要な要素だと考えます。

小林委員からお聞きしましたご意見は以上でございます。

○西座長 どうもありがとうございました。

本当に皆さんから貴重な意見をたくさんいただいて、もうこれでもいいのではないかなと思うのですが、先ほど池邊委員が言われたみたいに、ほかの方の意見を聞いてまた気がつかれたこともあるかと思えますので、もう一通り皆さんから意見をお聞きしたいなと思います。

それで、きょう鳩貝委員がちょっと早目にご退席したいというふうに言うておられるので、2巡目はこちらから行きたいと思えますので。では、鳩貝委員のほうからお願いします。

○鳩貝委員 学校では、ESDはまだまだですね。先生方は教科教育のことなどで目いっぱいな状況があります。それを時間割の中に入れてやれといってもなかなかできない。そ

ういうものこそ、こういう施設で、体験的に学ぶ。本物から学ぶ。道徳にしても、本を読んで「こうですよ」ということではなくて、学んでいく。そういう場として僕は重要だというふうに思います。

先ほど西委員長のお話がありましたように、イギリスでそうだという話を聞きましたけれども、やはり学校の先生方が葛西に連れていくことで学校全体の重点目標の達成に重要な役割をするのだよということがわかってもらえるようなメッセージをもっともっと出していけば、多いに活用してもらえ、子どもたちであふれてにぎやかな施設になると思うのですね。

そこにいわゆるシルバー世代など時間に余裕があつてどこに行こうかという人たちもそこに来て、子どもたちの元気な声を聞いて、実際に生き物を見て、癒されるということは、すごくいい施設になるだろうというふうに思います。

そういう意味でも、葛西は教育が非常に重要な役割を持ちます。そのためには、先ほど話がありましたけれどもいい調査・研究をきちんとやっていただくことがまた重要なことにもなりますし、先ほど小林委員からのメッセージですか、スタッフの持続性といひましようか、きちんとやっていくことがスタッフとして生きがいになるような施設づくりをぜひお願いしたいと思います。

まずは役割機能、それから、施設のあり方、いいものをつくっていく議論をこれからはうちよつと具体化できればいいなと思います。よろしく願いいたします。

○千葉委員 観光の視点が重要だと小林委員がメッセージを残してくださったのは非常にうれしく思います。

観光ビジネス、今、交流と、そしてもう1つ、体験というのが、2つキーワードになっておまして、日本にいらっしゃるインバウンドの方たちもほとんどが爆買いが一段落しまして、体験型、コト消費のほうに移っていると。そのため消費額が若干伸び悩んでいるというのがこのところ報道されているかと思ひます。とはいえ、どうしても時間の移ろいとともひに体験型のほうに外国人観光客も移っていくものと思ひれます。

あと、もう1点だけお話ししたいのですが、先ほど英国政府観光庁と申しましたが、いろいろな国々に日本にある観光庁のような政府機関がございます。特に、アジア各国が今力を入れているのが教育でございます。教育旅行という観点です。台湾観光協会、それから、マレーシア政府観光局だとか、いろいろなアジアの各国が、もしかしましたら日本にそういった教育旅行の観点で、デスティネーションとしてご訪問いただけるという、そういう日が近いというふうに思ひております。

以上です。

○西座長 ありがとうございます。

佐藤委員のほうから。

○佐藤委員 ありがとうございます。やっぱり結局のところこの4つの機能の中でも「教育」と「レクリエーション」、さらに観光も実はしっかり結びつくということが今のお話で

よくわかりまして、やはりこの相互関係というのは非常に重要だと思います。機能がいろいろと重層的に関係し合うというのは非常に重要だということがよくわかりました。

皆さん方のお話を伺っていると、やはり生態系の視点を重視という方向性と、教育が大事だということは非常に共通して出てきた話題のような気がしていて、これが大変わかりやすい、いいメッセージだなとつくづく思います。

その際に、非常に重要なポイントになってくるであろうものが、1つは都としてやるのですから、都民に対するサービスがどのようなものかということです。先ほど私、世界に対してどんなメッセージをという話をいたしました、都民に対して一体どのようなベネフィットが発生するのかというときに、先ほど鳩貝先生がおっしゃったような学校教育に対する貢献というのは、恐らく決定的に大事なのではないかという気がいたします。

これは、学校教育のサービスを全て無料の状態で行っていくかどうかということの議論も含めまして、特定のサービスに関しては有料化するようなことも考えながら、そこをいかに強化して、都民に対しての貢献というのを明示できるかということです。それから、もう1つ可能性があると思いますのは、やはり本当に力のある、規模的にも大きいボランティア組織がつかれるかどうか。特にこれからの高齢化社会の中で、余暇の多い年齢層の方々が、それぞれの持っている技術、技能に応じて、この水族館で、さまざまな形で、ボランティアとして活動していただけるような、そういう機会が提供できるかということです。

実は、ボランティアというのは、来てもらって万々歳ではございませんで、ボランティアのケアにもすごいエネルギーと人材が必要です。ですので、そういった人材の担保も含めて、ボランティアという形での参加の機会、体験の機会、交流の機会というのを提供できるかどうかといったところが検討の課題になるのではないかと考えて、今お話を聞いておりました。

○木下副座長 ちょっともう1回確認しますと、「役割・機能」「運営」「施設」これはどういう関係にあるのかということを考えるのですが、「役割・機能」はやっぱり何をやる場所なのか、あるいは、何のためにあるのかという、そのところだと思うんですね。「運営」は、それはどのようにそれを実現させるのか。「施設」は、どこというか、具体的な場所、どこでそれをやるのかということだと思います。

一方で、動物園にせよ、水族園にせよ、あるいは、博物館もそうなのですが、やっぱり実物を展示する場所であるということは、これはもう譲れない一線だと私は思っておりますので、そうするとそこに足を運んでもらわないといけないと。だから、この「どこで」というのはとても重要だし、どういう空間なのか。そこで、居心地のよさだとか、そういうものも当然考えなければいけないのですけれども。

そういう関係にある中で、この検討会はまずやっぱり何のために、こういう機会に、葛西臨海水族園をどう変えていくのかということをもっと検討すべきかなというふうに、改めて思いました。

その中で、きょう皆様のご意見を伺いながら思ったのは、この園はどこにつながるのかということ。つまり、どういう拠点たり得るのかということ。まず、東京湾のこの葛西という場所にあるのだという。そこからどこにつながっていくのかというときに、一方、陸につながっていくという見方もあれば、世界の海につながっていくというような、そういう海を相手にする施設としてどういう拠点、どこにつながっていくのかというのは非常に大きな問題としてあると思います。これは、当然展示を中心した活動の中に反映させなければいけないと思います。

それから、研究もどういう拠点たり得るのか。種の保存に関しては、大学等々のもっと蓄積のある研究機関というのがあるとは思いますが、しかし、ここでの研究というのは全ての活動のベースであり、かつ、世界の最先端の研究とつながっていくべきであって、葛西の場合はどのぐらい研究というものに重点が置かれているのかというのは、ちょっと私は外から見ると見えないのですが、一般的に博物館、美術館というのは、学芸員と呼ばれている人たちが、なかなか研究職たり得ないのですよね。実際に研究職として採用されている例というのはもう本当に少数だと思いますので、研究がベースで必要なだけけれども、きちんとそれが保証されているのかということも考えていただきたいなというふうに思います。

それから、教育の拠点としてこれはどこにつながるのか。学校というのはその1つの大きな連携先であることは言うまでもないのですが、もう1つ、今佐藤委員がおっしゃったように、ボランティアに代表されるような、生涯学習というのはやっぱり本当に重要だと思います。ある時期から、教育基本法の改正によって生涯学習というのでも完全に盛り込まれたわけですが、私が最初に美術館の学芸員をやっていたのは80年代で、このとき最初に生涯教育という言い方で登場してきたと思うのですが、それが学習に変わって、もっと自発的な捉え方になったのですが、それに伴ってそのボランティアというものが美術館に入ってきたときに、その言葉自体も新しかったわけですが、何よりもその人たちを入れる部屋がなかったのです。そのぐらい80年代は、日本の社会の中にボランティアというのは存在していなかった。95年の阪神淡路大震災のときがボランティア元年とよく言われますけれども、そのころから急速にそういう意識を持った人たちが出てきたのだけれども、既存の施設がそれをきちんと受けとめているのかどうか、なかなかこれは難しい問題だなと思います。

静岡県立美術館も30年の歴史の中で比較的早くボランティア組織を持ったのですが、やっぱりある意味一方通行だなという感じがして。実は、おとといボランティア交流会というのをやりまして、要望をいろいろ聞く機会をもったのですが、これはやっぱりある施設運営関係者というのは誰なのか。当然そのコアはメンバーは専属の人たちだと思うのですが、それもどこまでも広がってけると。

例えば歴史系の博物館なんかですと、ボランティアではなくて、パートナーという言い方をしているところもあるのですよね。そういう形で、社会の中にどういうふうにかかわ

っていくのかというような。言いかえると、ネットワーク社会の中で、どうしても具体的な、これは実物を中心とした、本当にリアルなこれは施設なわけですから、どこかにこれは存在していないといけない。架空の場ではないわけで。だけれども、それはどことどうというメディアでつながっていくのかということも、よく考えるというか、これからの大きな課題だなというふうに思います。

ちょっとまた美術館の話になってしまうのですが、美術館では、最近写真撮影の問題というのがすごく大きな問題になっていて、ある時期まで写真撮影はだめだとやってきたのを今かなり推奨するようになって。これは、広報宣伝という意味でも非常にメリットがあるということなのだけれども、デメリットも多分あるだろうと思いますが、博物館、美術館がどことつながっていくのか、SNSによって、今まで考えられないようなところとつながってしまっているのですよね。

だから、そういう。あくまでもリアルな拠点で、今のところそれは葛西にあるわけですが、これはどこと、いろいろなレベルで、いろいろなところとこれはつながり得るという拠点たろうとするのかということをおと残された時間で考えてみたいなというふうに思います。

○西座長 どうもありがとうございます。

では、川廷委員。

○川廷委員 またちょっと違った視点で。

1つの施設、組織として考えると、多分非常に社会責任というのは非常に大きくなってくるなど。整理するとわかりやすいのは、ISO26000なのですね。そのガバナンス、コンプライアンス、人権、労働慣行、環境、消費者に対する対策。ここでいえば、来場者に対する対策というのですかね。それと、コミュニティへの参画ということで、地域での位置づけというか、考え方という、7つの中核主題というのがあるので、それに照らし合わせても、いろいろと意見が出ているものをうまく整理していけるのではないかな。そういう施設としての社会責任というか、さっき道徳という言葉もありましたけれども、そういう組織として考えていくという視点はすごく重要なのかなと思って。

その中で、特にかかわる人たちとのコミュニケーションというか、そのコミュニケーションというのがすごく、当然当たり前なのですけれども重要で、施設としての展示の中のコンセプトだけではなくて、施設としてのコンセプトというのはさっきお話しましたけれども、それをどのように伝えていくのかということ、誰と一緒に伝えていくのか。さっきいろいろなつながりがあるという話がありましたけれども、それはステージホルダーズエンゲージメントなのですよ。NGOだったり、アカデミアだったり、学校機関だったり、もちろん都庁の職員の皆さん方、いろいろな方々がこの葛西の施設のステークホルダーに値すると思うのですけれども、その方々とともに、もしくはその方々に向けてどういう形で伝えていくのかということのコミュニケーションデザインというのが当然大事になってくる話だなという、どうしても職業柄そうやって業務を俯瞰をして整理をしていくという

のが自分のくせになっていますので、皆さんのお話を聞いていると、そういうところがやっぱりすごく気になってくる。

その上で、葛西の特徴的なのは、世界中を見ればそういう場所はあると思うのですけれども、やっぱり水際にあるというところ。街中ではなくて水際にあるのだということを考えたときに、さっきラインのお話をされていましたがけれども、水際というのは命を育むとても大切な場所だというふうにも教えられていますけれども、そういうところでの学びの場という、そのコンセプトとか、そういうものもいろいろとほかにはない魅力づくりというのできるのだろうなど。

そうなったときの施設のネーミングがすごく気になりますよね。これを表現する言葉は一体何なのだろうと。多分世界中を見渡してもない水族館というか、海洋館というか、そういうものにはないコンセプトを表現できるようなネーミングというのをひねり出すというのが最後に待っている大きなお仕事なのかなというのは、改めて実感いたしました。以上です。

○西座長 どうもありがとうございました。

では、海津委員、どうぞ。

○海津委員 やはりつながりの時代なのだなということを聞きながら、ふっと思いました。

私のほうで先ほど言い損ねたこととしては、研究者が育つような施設であってほしいなということが、教育の最終目標のところには1つあるかなということです。

そのためにはどういう施設であるべきなのかということに戻ってくるというふうに思います。

もう1つ、私が専門にしているのはエコツーリズムとあって、地域の中でつくられていく観光のビジネス化ということなのですが、4つの満足ということが大事だということをよく言うのですね。1つは環境に対して、環境がよりよい状態であるべきということ。それから、もう1つは顧客満足。これも観光なので当たり前なのですが、それから先ほども出ていましたけれども、ガイドというか、働いている人たちが満足できること。地域の満足という4つの視点がベーシックに必要なことなのですね。

多分これは水族館も同じだと思うのですが、これからの運営の中で、地域の人たちはどれだけかかわれるのかというところで重要なかもしれないなというふうに思います。ボランティアという視点もあると思いますし、整備を進めていく過程で参加していくということだとか、そんな、いろいろな方法があると思いますけれども。

その中で、イギリスの例がちょこちょこ出ていますけれども、TCVという団体がありまして、昔BTCVとっていたのですが、国立公園であったり、地域であったり、村であったり、いろいろなところでちょっと直したいとか、道をつくりたいとか、メンテナンスが必要みたいなときに、簡単な募集を出すと、そこに興味を持った人たちがさっと集まって、さっと作業をして、さっと帰っていくというもので、毎週コンビニに、雑誌スタンドみたいなところに募集告知が出ているのですが、本当に軽いかかわり方ででき

るものですね。組織をつくって、迎え入れてという、すごく大仰な感じになりますけれども、そんな小さな作業は、きっと水族館はいっぱいあるはずだと思います。そんなところから水族館そのものに興味を持ったり、日々子どもたちを連れてくるようになったりという、だんだんかわりが深くなっていくかなというふうに思いました。そんなつながり方ができるかなということですね。

あと、最後ですけれども、先ほど多言語化の話が出ていて、最近いろいろなところで多言語化をやめる方向になって。国立公園なんかでも、表示で4カ国語、簡体字、繁体字いっぱいあったのですけれども、日本語と英語だけにしておいて、あとはQRコードをつけてしまって、もうみんな「自分で情報をとってください」というふうになっていて。あまり大きな問題も起きていないということなのですね。

ICTをどう活用しながら、生き物はリアルなのですから、メディアをどう活用しながら新しい水族館施設をつくっていくのかということ、ちょっと今の時代の1つのトピックかなというふうに思います。

以上です。

○池邊委員 先ほど木下先生がおっしゃられた「レクリエーション」という言葉と、あと、「教育」というところをちょっと再検討してみました。

いろいろあるのですけれども、まずはやっぱり子どもたちに考えさせる。全部を与える、披露して理解しろというのではなくて、考えさせる施設であることと、2つ目には、やっぱりクリエイティブであること。それから3つ目には、さっきレクチャールームという話がありましたけれども、見せて、またレクチャーしてもいいのですけれども、発表の場であることというのが何か必要なかなと。

といいますのは、実は私の学校は、ちょっと小学校のときに実験的な教育をしているところで、小学校1年生のときに、今思い出すと、上野動物園で写生会をさせられました。自分から動物を選んで、丸半日ですけれども、動物を見ながら写生をすると。動物を選ぶところから、あるいはどういうシーンを自分が描くのかということも含めてやらされたということ。あと、自分の娘が小学校のときに、海という名前で作曲をしたことがあります。そういうのを考えると、やっぱり水族館を見て、子どもたちはいろいろなものを得ます。それは、生態系とかそういうものだけでは全然なくて、ダンスがあれば、ファッションもあるし、音楽もあるし、最近の子だとゲームやアニメを思いつく子もありますし、それがもっと今の模型ではなくて、フィギュアみたいな、ああいう世界を思いつく子もあると思うのですけれども。そういうようなものとして何か子どもたちが、次に、水族館から得たものを何か発表できるというような、何かそういうプログラムにできないのかと。

そのためにはということなのですから、やっぱり初めて葛西に来る人たちと、2回目に来る人たち、また、興味も、さっき人文的というお話もありましたけれども、やっぱりすごく生息として興味がある子と、何か形とかおもしろい、クラゲなんかもそうですけれども、そういうふわふわとしているような、そういうものに興味のある子と、いろいろ

興味が違うのだらうなというふうに思いましたので。プログラム別なんていうのはいろいろなところで工夫をしていますけれども、何かそういう、1回目、2回目みたいなものと、興味別みたいな、そういう回し方というか、見せ方というか、そういうものがあればいいのかなというふうに思いました。

あとはそれを最後に手を動かして、何かそれこそつくれるとか、そういうものが、宿題みたいになってしまうとちょっと問題なのですけども、そういうものができる場が、交流ルームみたいな、終わって帰ってきたときに、どんなことを感じたのかということも単純にしゃべるといって、今の子どもだとしゃべれない子もいますけれども、そういう何かの、自分の得意なメディアを使って発信できるような、そういうものを考えると、多分あまり。やっぱり水族館というのは、動物園に比べると割と、悪い言葉で言うと押しつけ的にとにかく見て学べみたいになっていて、さわることもできないし、ただ一生懸命見るという感じになるので、見たものを発散する、何かそういうことによって、子どもたちのアクティビティみたいなものをうまく育てていける、そんな部屋とか、仕組みみたいなものができるんじゃないかなというふうに思いました。

以上でございます。

○西座長 どうもありがとうございました。これもほとんど皆さんいろいろ言われて、あれなのですね。

私も、いろいろ水族館を運営するためにいろいろなところを見に行ったりしてやっているのでですけども、水族館はやっぱり、前も言いましたけれども、非常に年齢層が広いということが、ほかの類似の施設と比べて特徴ではないかなと思います。

美術館はこのごろ非常におもしろい活動をいろいろしておられるのですけれども、やっぱり幼児にはまだちょっと難しいかなという感じがするのでですけども。水族館を見ていると、1歳ぐらいですね。ものがわかって、動いているところ、それぐらいからもう確実に楽しんでおられるし、親子で楽しんでおられるし。それから、老人ホームとか、そういうところでもほとんど動けないような方、そういう方も満足していただけると。これは、あまりほかにはないのではないかなという気がいたします。

最近しきりと言われていた癒しということで、クラゲを初めとした、そういうものが癒しの場としてやられているということで、きょうちょっとそういうことは出なかったもので、1つつけ加えておこうかと思えます。

それから、参加性ですね。博物館で参加性と、私なんかが思っていたのは、いろいろな行事に参加することだと思っていたのですけれども、最近もっと展示とか、ほかのこと、研究なんかに参加するという、全ての運営面に参加するというふうにいわれてきているので、やっぱりそういうことも目指していきたいなというふうな気がします。

それとも関連して、なかなか日本でボランティア、特にアメリカ的なボランティアまで育てるのは難しいかと思うのですけれども、アメリカの水族館はすごくボランティアが多いですね。1,000人ぐらいのところがあって、私も何とかしてボランティアをうま

く育てるといったら変ですけれども、できないかと思って聞きに行ったのですけれども、いろいろな情報はボランティアさんにも全て伝えると。ボランティアさんは、ノンペイドスタッフだというふうに言われて、日本と随分違うなと思ったのですけれども、一長一短にそこまでいかないにしても、なかなか限られた人員というか、それだけで運営するというのは費用が難しい面があると思うのです。だけれども、やっぱりそういうボランティアさんの力を借りてやっていくという、そういうことができるシステムとハードというものがあればそれが少しでも近づけるのではないかなという気がするのですけれども。そういうものが目指せればいいなというふうに思いました。

ということで、少し早いですが、私の役目はよろしいでしょうか。

いろいろ今、皆さんから非常に貴重な意見をたくさんいただいているのですけれども、やっぱり新しいものをつくるという形でいろいろ考えていかなければいけないと思うのですけれども、もう1つ重要なのは、現在葛西のほうで実際に動いている組織があって、そこで働いている人たちがどういうことを考えているか、次のものに期待するかというようなことの意見を聞かせてもらえるような、そういう機会があれば、さらに地についたものになるのではないかなというので、事務局のほうにそういうことを要望としてお願いしたいというふうに思います。

○小林課長 今、西座長から、職員の思い、考えというところでご提案をいただいたところでございますので、次回、第3回に向けまして、ちょっと葛西臨海水族園とも相談をしながら、どういう形でご紹介できるかというのはございますが、日ごろどういうことを考えているかというのも含めまして、ご紹介できるように調整をさせていただきたいと思えます。

○木下副座長 この検討の中に、名称の変更まで盛り込まれている……。

○小林課長 今のところ名称の変更までは考えてはいなかったのですけれども、実は、事前にちょっとご説明を差し上げました中では、ややちょっと名前がやぼったいのではないかなというようなご意見はお聞きはしてございました。ですので、呼び方、名前というの、やはり1つ訴えかける要素にはなるかなと思いますので、そういった視点でのご意見といったものも含めて、お話しいただくのは問題はないかと思っております。

○木下副座長 提言まではいいと。大きく東京水族館とかね。すごいシンプルなアイデア、手もあるのかなと思いました。

○西座長 私が司会をするようにと言われたのはここまでなのですけれども、時間はまだあるということで、せつかくこれだけの方がおられるから、もう少し自由に意見を出していただいたほうが。木下先生のような、今のような。せつかくだからと思うのです。これで終わってもいいのですけれども、例えば、先ほど帰られましたけれども、鳩貝委員が言っておられたような、教育部門の部署の方にここに参加してもらうというのは可能なのでしょうか。

○小林課長 これまでも皆様からご指摘をいただいております、やや縦割りの部分がま

さに今こう形としてあらわれているのかなと思いますが、お話をいただきました内容を事務局のほうから、実はこういう話が出ていてというようなところで、庁内での情報共有をするのですとか、関係者に話を聞くといったところは必要かと思っております。

ただ、この席にちょっと同席までができるかどうか、非常にやはり広がってしまう可能性もあるかなと思ひまして、一旦お話は事務局のほうでお聞きをさせていただいて、必要な部分は庁内で調整をするという形にできないかと思っております。

○木下副座長 前回、西委員長と帰るときにちょっとお話していたのですけれども、やっぱり結局これは、我々は外部の委員で、検討するだけなので、やっぱり「こう変えたいのだ」という、その声がない限りだめだなというふうに思うのですよね。つまり、水族館が「自分たちはこう変えたいのだ」という、これは別に葛西に限らず、日本の水族館全てにいえることだと思うのですが。「水族館はこうあるべきだ」という声を上げる人がいない限り外から幾ら言ってもだめだなと、私はそう思うのですよね。ぜひ、聞かせてほしいなと思います。次回。

○小林課長 わかりました。園と調整をさせていただきまして、実際の担当をしております職員の声といったものをご紹介はさせていただきたいと思ひます。

○西座長 ほかにいかがですか。

○佐藤委員 先ほどちょっと話が出たと思うのですけれども、ICTというか、今どきのコミュニケーション技術をどういうふうな形で、この施設の中にうまくつくって、うまく使っていくかという点もたいせつだと思います。

リアルな生き物と生態系がそこにあるというのは大前提でございますが、そこにあるものの意味を引き出すためのさまざまな手法として、いろいろな技術が、今本当にバーチャルなものから、さらには、言ってみればテレカップリングみたいな世界で、この水槽の中に再現した自然の現時点での現場の様子はこうですよ、みたいなものが、今どき普通に映像で撮れたりしてしまうわけですよね。こういったものの活用の可能性というのは、今までのこれまた水族館は常識を大きく変えるのではないかと。つまり、単にそこに生き物があるだけではなくて、リアルな自然とのつながりが絶えず起こっているし、その場で起こっている人間活動まで取り込むような形で、全体として1つの展示がつけられるようなやり方というのがありそうな気がしてまいりました。今、まさに議論を伺っていて、そういう夢が描けるなという気分になってまいりました。

これは、ある意味では、本当にリアルな人と海とのかかわりを伝えるための施設として水族館が役割を果たせるのだという、強いメッセージにもなるのではないかとこのように思ひ、話を伺っていました。

○西座長 いかがですか。何かございますか。

○海津委員 言い出したので。こういうふうにしたらいいと具体的なアイデアがあるというわけでは今ないのですけれども、インタープリテーションツールとしてのICTの活用ということかなというふうに思うのですよね。先ほど一生だとか1年間という話もありまし

たし、人には目に見えないところで寝ていたりということもありますので、そういったところを保管するツールとしては、本当に生のものと対応する中で使えるであろうということもあると思います。

それから、今ここにいない人と水族館をつなぐというツールとしてのICT、英国の話が出ていましたけれども、そういう形でのつながり方、世界中とつながれるわけですので、本当に広がっていくというふうに思います。

○西座長 どうもありがとうございます。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、事務局のほうにお返しいたします。

○小林課長 西座長、ありがとうございました。

次回でございますけれども、お配りしてございます資料の中にスケジュール表がございます。第3回は4月に、都庁の会議室での開催を予定してございます。詳細は別途ご案内をさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、以上をもちまして、第2回葛西臨海水族園のあり方検討会を終了させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

(午後0時07分終了)